《着衣するヴェラ・II》 1998年　50×50cm　油彩　個人蔵

ふくよかで繊細な世界を描きたいのです。

早川俊二

Shunji Hayakawa

はやかわ・しゅんじ
1950年長野県生まれ。73年創形美術学校卒業。74年渡仏。76年パリ国立美術学校にてMarcel GILIに師事。92年〜アスクエア神田ギャラリーにて個展。現在、パリ在住。2015年6月より、北野美術館別館（長野市）ほか、札幌、新潟にて早川俊二展を開催予定

24歳のときに渡仏。古典絵画に圧倒されデッサンに明け暮れる一方、メチエにこだわり絵具の調合から研究を始めた。すべては「繊細で柔らかく、しかも強い世界」の追求のため。そして、そこになくてはならないテーマが女性像だった。

「理由はシンプルで、女性の繊細さ柔らかさが作品の世界観に重なったから。それに、人間を描くことへの欲求をどうしても捨てられないのが画家なんですよ」

彼を魅惑して離さない女性像がある。ダ・ヴィンチの《受胎告知の習作》だ。その一枚のデッサンを平面絵画の頂点のひとつと定めた彼もまたそこに連なろうとする。早川の作品に漂う、静謐でふくよかな情趣。それは女性の姿を借りて描かれた聖愛の象徴のようですらある。

《まどろむAmery-2》 2008年　120×120cm　油彩

画家に聞く女性像①――ピカソ《海辺の母子像》

パブロ・ピカソ
《海辺の母子像》 1902年
ポーラ美術館蔵
©2012-Succession Pablo Picasso-SPDA(JAPAN)

ピカソの「青の時代」は、友人の自殺によって始まったとされています。憔悴、貧困、人々の悲哀…。いずれもネガティブなテーマですし、どちらかといえば陰気な色を使っているのですが、実際に目にすると画面に引きずり込まれるような力強さを感じるのです。特に好きな作品は、イギリスのテートにある《シュミーズ姿の少女》（1905年）ですが、日本ではポーラ美術館で《海辺の母子像》を見ることができるそうです。未来への希望を感じさせてくれる魅力があります。（早川）

作品はここで!
コレクター鈴木常司「美へのまなざし」第Ⅲ期　杉山寧とポーラ美術館の絵画

会期　〜7月7日(日)まで　会期中無休
会場　箱根・ポーラ美術館
入場料　一般1800円ほか
☎0460(84)2111

p18-62-1.indd 20-21　13/06/11 16:38